

# 敬愛大学の 学生ボランティア活動

地域とつながり、地域で学ぶ！地域に学ぶ！

千葉県稲毛区にある敬愛大学は2017(平成29)年、「地域連携センター」を設立し、地域連携活動や生涯学習活動とともに、ボランティア活動を推進してきました。学生たちは地域とのつながりを活かしながら、教育支援や地域活性化支援、パラスポーツ支援など幅広い分野のボランティア活動に活発に取り組んでいます。



## “地域の伴走者”を目指し、地域とのつながりを重視

敬愛大学は、平成29年に大学と地域をつなぐ窓口として「地域連携センター」を設立しました。ボランティア情報を収集・整理して学生につなげ、安心して活動に取り組めるように継続的に支援するボランティアセンターの役割も担っています。

「学生にボランティア活動を紹介する前に、どのような団体で、どのような活動なのか、団体の方にお越しいただいてきちんと話を聞くことにしています。『ボランティア活動をやった良かった』と学生に思ってもらえることが大事なので、自信を持って紹介できる活動だけを紹介するように心がけています」と、センター長の藤森孝幸さんは話します。



敬愛大学地域連携センター長 藤森 孝幸さん

## 地域で学び、地域を盛り上げる「地域活性化ボランティア」

大学として特に力を入れているのは、「地域活性化ボランティア」です。自治体や町内自治会、商店街などの行事やイベントに準備段階から参加し、地域住民と協力しながら活動しています。とくに地元、稲毛区の活性化のために尽力してきました。

地域との関係づくりについて、藤森センター長は、「民生委員の研修会に大学の教室をお貸したことをきっかけに、地域の様々な活動に呼んでもらえるようになりました。逆に、こちらから地元のお祭りの実行委員会に飛び込んだこともあります。お互い踏み込んだことで良い関係を築くことができ、学生たちのこともとても可愛がってもらっています」と話していました。



その他、「教育の敬愛」と言われる強みを活かした「教育支援ボランティア」、東日本大震災の被災地に学ぶ「災害復興支援ボランティア」や、「大学間連携ボランティア」など、学生は、地域連携センターの支援を受けて、様々な分野のボランティア活動に取り組んでいます。

## 子どもの学びのために学生が企画する本格的なワークショップ



教育ボランティアIris代表 藤本 治美さん (教育学部3年)

部活動の1つである、教育ボランティア「Iris(アイリス)」は、子どもの学ぶ力を育成し、遊び場を提供するとともに、地域活性化を目指して学生自身の手で設立されました。市内美浜区にあるショッピングセンターの空き店舗を無料で借り受け、子ども向けワークショップを月1回開催しています。

注目すべきは、開催場所の確保から毎回の企画立案、準備、当日の運営に至るまで、すべて大学教員等の手を借りず、学生自らが行っているということです。例えば身近な材料でプラネタリウムを作成して星や星座について学んだり、実験やゲームを通して静電気について学んだりする楽しくも実用性の高いワークショップが大変評判で、友だちからの口コミで参加してくる子どもたちも多くなります。様々な団体や自治体からも「うちでも開催してほしい」という依頼が、受けきれないほど寄せられています。



楽しく学べるIrisのワークショップ

## ボランティア活動を通して「自己有用感」を高める!

藤森センター長が学生のボランティア活動に期待することは、「自己有用感を高めること」だといいます。「人から頼りにされたり、人の役に立っていると実感できることがボランティア活動の醍醐味だと考えていますので、一人ひとりの学生が自己有用感を得られるように、サポートしています」。

ボランティア活動に「やらされ感」などのマイナスイメージを持つ学生もいますが、その活動の醍醐味を知っているからこそ、藤森センター長は「地域で学んでおいて」と学生の背中を押して送り出しています。ボランティア活動の一步を踏み出した学生は、地域の人たちと交流するなかで、教室では学ぶことができないたくさんのことを学んでいます。

## 敬愛大学でボランティア活動をしている2団体の代表にもお話を伺いました。



ボランティアサークル「Love and Action」  
市田 ゆり奈さん (国際学部3年)

—Love and Actionでは、どのようなボランティア活動を行っていますか。

ゴミ拾いや、「敬愛大学」チームとしてポッチャの大会に出場したり、千葉市内で古着等を海外途上国に送る活動など様々なボランティアを行っています。

—どんなところにやりがいを感じていますか。

たくさんのお金を途上国に送ると「これぐらいの数の古着がこれぐらいのお金になる」という新たな気づきがあって、面白いと感じます。あとは、お手伝いをして喜んでもらえることが嬉しかったです。

—コロナ禍ではどのように活動されていましたか。

自分がサークルに入ったときはコロナ禍の真っ只中で、活動もほとんどできませんでした。最近になってようやくできることが増え、今は今後の活動を模索している段階です。古着等を海外途上国に送る活動はコロナ前から先輩方が続けていた活動で、先輩が繋いでくれたのでまた一緒に活動できるようになりました。

—今後はどのようなことに力を入れていきたいですか。

活動を通して、途上国支援について考えさせられることがたくさんあります。今後は途上国への支援やその子どもたちの支援についてもっと何が出来るか考えていきたいです。

—最後に一言お願いします。

私たちLove and Actionは、「やりたいときに、やりたい人が、やりたいことをやる」という考えがベースになっています。以前、とあるボランティア活動を行ったときに強制的な感じになってしまったことでメンバーの士気が下がってしまい、活動をするのが大変だと感じてそのようなやり方はやめました。新年度になり新入生が入ったので、興味を持ってもらえるようなPRをしていきたいと思っています。



たくさんのお金を途上国へ送ります



東京パラリンピック競技ボランティア  
小枝 亜耶乃さん (国際学部4年)

—ソフトパラフェンシングについて教えてください。

車いすフェンシング競技をベースに、障害の有無や年齢に限らず誰でも楽しめるスポーツを目指して作ったのが、ソフトパラフェンシングです。競技に使用する剣やマスクなども手作りすることができ、「手近なもので誰でもできる」というのが魅力です。

—ソフトパラフェンシングを作ったきっかけは何ですか。

2021年に行われた東京パラリンピックで、千葉大学、帝京平成大学、敬愛大学、植草学園大学の4大学の学生が車いすフェンシングの競技ボランティアに参加したことがきっかけです。東京オリパラでは「復興」というテーマがありましたが、「自分たちはパラフェンシングのボランティアで終わってしまい、何も残せていない」という思いから、ソフトパラフェンシングを作りました。

—現在はどのような活動をしていますか。

競技団体をつくりました。ベースとなるルールはありますが、そこから先は自分たちで広めてほしいと思っています。「普及

審判員」の制度も整え、今では200名以上程度がレクチャーを受けてソフトパラフェンシングを楽しんでいます。もともと「復興」をテーマに始まった活動ということもあり、今年3月に宮城県で普及活動を行いました。競技を知ってもらい、交流するツールのひとつとして活用してほしいと思っています。

—今後どのようなことに力を入れていきたいですか。

千葉市内で9月に行われる「パラスポーツフェスタちば」でブースを設置できるようになりました。まだまだ作りたての団体で「どんな反応をされるんだろう」と不安な部分もありますが、もともとパラスポーツに興味のある方たちはソフトパラフェンシングにも興味を持ってくれ、「そんなスポーツがあるんだね」といった声などを聞くとやりがいを感じ、広めていきたいと思っています。子どもたちへの普及活動も行っていきたいです。



ソフトパラフェンシング